

# 彼岸の彼方

# 第1章 捨子花

Second Encounter:Falling  
in the sky

## 就寝

月明かりだけが、私の頼りだった。電球では眩しすぎる私の目には、あの大きな照明の、しかし淡い光がちようど良かった。そしてここではどうしてか、月が大

きく見える。現実にはありえないほどに拡張された青白い月が、町を押しつぶそうとしている。まるで私の合図を待っているみたいに。もしかしてあの月は、中空でピアノ線に固定されていて、後はほんの一突きでもすれば、私の細長く心もとなない指でも落ちていくだろう。それは—— ほんのちっぽけな自尊心だ。

注意を切り替える。拘束されたように動こうとしない足に、今日もまた落胆して、私は区切りにならない眠りに入ろうとする。眠たくもない目を閉じることは、想像するよりずっと難しい。だからまた目が泳いでしまう。ガラスの向こう側、真っ暗で光の積もる町の俯瞰へと。

のっぺりと張り付く壁紙のような風景

は、一目でココがどれだけ異質な場所なのかを教えてくれる。けれど、そこは決しておどろおどろしい魔境というわけでもなかった。例えるならそう、子供部屋

のような雰囲気。ありとあらゆる『体験』に飢えている子供達を、満足させるために誂えられた世界。延々と広がる文明の平野は好奇心を掻き立て、果てのない夜空は恐怖を覚えさせてくれる。そして人工の光に飲まれながらも、懸命にぼつりぼつりと輝く星達は、理由のない希望を与えて、安らかな眠りを誘う。

そんな景色を一望する丘の上に立つ、大きな洋風の屋敷が私の住処だった。

私の部屋は壁の一面がガラス張りになっていて、綺麗な夜景をその隅々まで見渡

せるようになっていた。

だからここを『展望台』と街の人たちは呼んでいる。

周りは代わり映えない規範的な住居ばかりのこの街に、古くからある異質な館。町の住人たちにとって、ある種のシンボルとなるのも理解できなくはなかった。

だけど、そんなことはもう私には関係のないことだった。日に日に弱っていく体は、ついに立ち上がる自由さえ私から奪い取ったのだから。そんな体で町に下りることなど出来るはずもない。結果、外との関わりなど気にする必要もなく、この家がなんと言われようと関係はない。死の瀬戸際を彷徨う私にはただ、この風景を睨み続けることしか出来なかった。

だから私はあれが恨めしい。私を置いてけぼりにして勝手に前へ進んで、何もかも有耶無耶にして平穩を歩み続ける彼等。

でもそれが私自身の逆恨みであることは明白で、無意味な憎悪に限りある生命を費やすのは、あまりにも愚かだ。

しかし未練を捨てきれない、過去と折り合えない自分がいることも真実だった。

地主だったお父様が建てて、お金以外に残していった唯一の遺産であるこの住处。『意味のある』という意味で遺された、私のヨスガであり足枷。この束縛から解放されて、あの町で遊べたらどれだけ素敵なことだろうか。日焼けに肌を搔いて、沁みる塩水に目を目を窄めることの、どれだけ不可能なことか。願わくばもう一

度——いや、これはやめよう。

「お嬢様。まだ起きていらっしやったのですか。——お体を大切にしないと」

控えめに開いた扉の先から、いつもの声が聞こえる。心配性な母親じみた声。

「うん、ごめんなさい。そうするわ」

これ以上彼女に無駄な時間を使わせたくはない。私は掛け布団をガサガサ鳴らし、大げさに包まった。

おやすみなさい。

浮きかけた足を落として、私はベッドに埋没した。

## 1・1

夏の雨ほど焦れたい物は無いと思う。ついさっきまで晴れていた空から、急に降りだした雨。しかも小雨なんて生易しい物じゃない。それはもう台風でも来たんじゃないかって錯覚するぐらいのどしや降り。最初は通り雨だと見くびっていた人々も、今は雨に追われて駆け回っている。そんな私たちをあざ笑うかのように、温い豪雨は瞬く間に街を覆っていく。行き場を失いアスファルトを右往左往する水を踏んで、ぐしょぐしょになってしまったスニーカーや靴下は重く、そして纏わりついて気色が悪い。いっそのこと脱いでしまいたい、小学生でもあるまいし公道で裸足になることは流石に無理だ。もち

ろん、傘など持っていないのだから上もびしょ濡れで、まあこれはこれとしてちよつとした画にはなるんじゃないだろうか。

雨も滴るなんとやら。——馬鹿馬鹿しくて恥ずかしくなってきた。

痛いぐらいに勢いが強いシャワーを浴びるように、大粒の雨を受け続けていると、知らず知らずの内に体力は奪われていく。走り始めてから五分ほどたったはずなのに、一向に目的の場所は姿を見せない。わりかし体力には自信があったのだが、今の状態だとたった十メートルほどを走っただけで、私の体はすぐに音を上げてしまう。ヘトヘトに成りつつも、このまま雨に打たれ続けるわけにもいかず、休むことも急ぐことも辛い現状に私は今

日という日を恨んでしまう。

ああ、なんて災難な日なんだろう。感慨深く——実際にはそれっぽくしただけだが——私は天を仰ぎ、目に雨粒を受けてしまう。

私は恨もうにも恨めない自然の偉大さに、ただ辟易とするだけだった。

鐘の音に振り向く人々の視線を感じて、

私は縮こまってしまった。あんな小娘がなぜここに、と皆聞きたがっている。だがこんなときにこそ、堂々と立ち振る舞うべきなのだ。開いたアンティーク調の扉を抜けて、私は張り詰める空気を目一杯肺に貯め込む。

そしてわざとらしいほど大きな歩幅で、

席に向かった。

独特な匂いの充満する店内の雰囲気は、故意さえ感じる程に古臭く、落ち着きのあるものだった。そんな中を、恥ずかしいぐらい大股を開いて闊歩する私は、逆に不遜なのではないだろうか。まあ、席に到達した今、それを後悔する必要もない。私は目の前の人間に会釈して、長身の女の横に座ろうとした。

「遅いぞ、玲華<sup>レイカ</sup>」

結った長髪を靡<sup>なび</sup>かせながら、女は不満そうに、あからさまな声で唸った。それに、私が引こうとした椅子にわざと足を絡めて、妨害してくる。

「冬姫がもっと早く時間設定してれば良かったんでしょ」

これは断じて私の責任ではない。主張は激しく、私に引くつもりはない。ただ依頼者の眼前で、この先予測される痴態を晒せば、信用など地に落ちて——最悪地の底にのめり込む——せつかくの収入の機会を失ってしまう。ここは互いに譲歩して、私はひとまず席についた。

私の席の前に、依頼者の女性は無言のままに座っていた。肩をすばめて、落着きのなさそうな振る舞いを続けている。おそらく、私達の不仲な場面を目撃してしまつて、どうすれば良いのか狼狽しているんだ。

断つておくが、私とこの女の関係は、決して悪いものではない。時折あつちが、常識とずれているだけだ。今日だって、待ち合わせに指定された時間は午後の一

で、私は学校だった。わざわざ先生たちの目を盗んで抜け出してきたのに、非難とは散々な仕打ちだろう。

「はじめまして。私は御巫冬姫<sup>みかなきかすき</sup>。こっちは——」

「九条玲華<sup>くじょうれいか</sup>です。よろしくです」

私は頭を下げたが、冬姫は下げない。この女は誰にでもこんなスタンスで、本人曰く、このほうが友好的に見えるだろうと豪語するが、どう見ても不躰な人間にしか見えない。或いは、何事も斜に構えて他人とは違つと高をくくっている勘違い野郎、か。

何れにせよ、ここで深く掘り下げる話題ではない。私は切り替えて、目の前の人間に興味を向ける。

小柄で、存在感の薄い人だ。ショートカットとかなりの目の隈が相まって、暗い印象を与えがちな顔立ちをしている。しかし整っている。少し血色を明るくすれば、その薄幸さも洗い流して、そこそこのものにはできるだろう。

品評はここまでにして、私は彼女の言葉を待った。

「工藤南です」  
くどうみなみ

聞きづらい声だ。小さすぎる。喉の半分が塞がっているのか。無意識でも意識しているにせよ、どこか抑えている気がする。隠し事、とまではいかないが、後ろめたさに支配されていることは確かだった。

「それで、工藤さん——」冬姫は率直

に聞くつもりだ「——今日はどのような用件で？」

工藤は口を開かない。黙ってばかりで、その目は酷く泳いでいる。塵でも追いかけているのかと疑いたくなる。無駄な時間を消費することに、私は苛立ちを覚える。貧乏ゆすりを高速で繰り返す私の足を、冬姫はヒールの踵で踏んづけた。

「イタッ」

思わず声に出してしまったが、工藤には聞こえていないだろう。耳元で囁かれる「おとなしくしている」の言葉通り、私はわざとらしく背中を伸ばし、そのまま全身を固定した。

「あの、話しても、良いですか？」

「どうぞ、お構いなく」



「えっと、その、何から言ったらいいかわからないんですけど、その、あの、変なことなんですけど、私——赤ちゃんを取られたんです」

驚いた。彼女が経産婦だったなんて。失礼かもしれないが、どう見ても子供を養えそうな人間ではなかった。

「誘拐、というわけですか」

誘拐とは大抵、『神隠し』のことだ。それが私達二人の、いや依頼者も含めての共通認識だ。ありきたりではあるが、私達の仕事の大半を占めるもの。だったら、今回もつまらないものだ。これらの結末は、親子との感動の再会、惨たらしい別れ、ただの仲直り、夜逃げ、家出……。原因が誘拐犯や家族喧嘩から、『悪い』魔法使いや

家督相続問題に挿げ替えられるだけだ。

早々に失せた興味の欠落を埋めるように、私の手は遊び始める。指を鳴らして、簡単なストレッチをする。

ああ、早く帰りたいな。そう思っていた矢先、私の意識を強引に引き戻す会話が、二人の間に続いていた。

「いや、誘拐じゃないくて。あ、な、なんと言うか」

「落ち着いて。深呼吸でも」

工藤の口調は激しくなっていた。冬姫の提案など端から聞く気もない。溢れ出る言葉を、まだ辛うじて残る理性で選別しようとしていたが、時期決壊するのは明白だった。

「赤ちゃん、お腹の中に、中にいたんで

すよ。だから、そんなことあるはずなのに。消えたんですよ。お腹から。子供、私の子供。どこに、どこに言ったのかわからなくて。でも痛くもなくて。重くもない。——おかしいですよね？」

私達は反応に困っていた。工藤の言葉をそのままに受け取れば、彼女は妊娠中に胎児を失くしたという。しかも一切の外傷も、違和感もなく、自身の知らぬところで、突然として喪失した。

特異な事例だ。冬姫もより慎重に事を運ぼうとする。こういった場合、あらゆる可能性を求めるべきだ。それが私達二人の教訓であり、彼女はそれに倣う。

「想像妊娠、というものをご存知ですか？」  
「想像……」

「実際には妊娠していないにもかかわらず、妊娠における兆候が現れる、一種の心身症なのですが——」

「そんなはずない！」

机を叩く工藤。あからさまな怒り。突然の剣幕に、私は思わず反応してしまう。

「私は、私には——いたんです。絶対に、赤ちゃんがいた！　嘘じゃない。産もうって決めてた。検査もした。つわりもあった。決めてたのに。私の子どもなのに。どうして、どうして……」

ただ「どうして」を繰り返して、また並列に机をどんどんと叩き続ける。工藤はもはや壊れたスピーカーだ。これ以上の対話は見込めない。周囲の目も集まりつつある。このままいけば私達も店側も、誰

も得しない。

冬姫と示し合わせて、私は工藤の肩を持ち上げた。力なく垂れる工藤の体を、もはや引きずるように。泣き止むのも待たずに、私は激しく上下する背中を抑えて、彼女を出口に誘導する。

外は相変わらずの雨で、分厚い雲に日光はほとんど遮られていた。青みがかった影の中を進む。

途中、彼女の涙が、私の腕になすりつけられる。

気持ち悪い生ぬるさ。雨と同じ熱と、更に増した粘度を持った雫。拭きたいが、手は塞がっている。

どうして彼女は、ここまで熱い涙を流すのだろうか。

もはや疑うことは出来ないだろうと、冬姫は言った。

「私は彼女を家に帰す。玲華、今日はここまでだ」

近くのパーキングに止められた、冬姫の車に工藤を載せて、今日の仕事は終了した。

## Interlude:Falling in the sky (1)

妊娠期間の長い、離巢性の動物と考えることができるヒトは、しかし本来予想される出産時期よりも早く産まれ落ちる。ポルトマンはこれを『生理的早産』と定義し、生理的早産によって産まれた無

能な新生児を『子宮外の胎児』と呼んだ。

## 1・2

私の皮膚を焼く日射に音を上げて、私は日陰に逃げ落ちた。ブロック塀にもたれかかって座り込む。背の低い建物の並木道だ。完全な住宅街で、ここには消費しかない。だから、平日昼間の町中は驚くほど静かで、動く日陰を見失えば、ここは静止した時間の中だと言われても、ならん疑いようがないだろう。白い日差し、中途半端に漂白されて、惜しいところまで純白に近づいた灰色の世界。

そろそろ出席日数を考えはじめないと。先日の面談の続きを、まさか彼女の家で

再開させるなんて。しかも、ひと目を気にしてこんな時間帯を指定され、また私は無断欠席する羽目になってしまった。

ただあのままで放置できるかというと、それは無理なことだろう。人であるのなら、彼女の錯乱——助けを求める最後の手段だ——を無視して、何食わぬ顔でどうやって日常に戻るだろうか。私は無理だ。

その後の話を冬姫から聞いた。工藤はずっと塞ぎ込んで、呼吸すら徒に疲れを誘うだけだったという。

彼女は相当な精神力を消費して、あの場にまで出向いていた。工藤はここ最近、自らに降り掛かった何らかの災難によって、もはや日常生活を正常に営めない状

態にあるという。一日中引きこもって、食べるものもなく。餓死の寸前に近所の住人に助けられたという。それがなければ今頃は――。

正直、初対面はただのヒステリー女かと思っていたが、その認識は改めなくてはならない。

この熱さが落ち着いたら行こう。

待ち合わせは正午きっかり。

そろそろ立ち上がろう。

私はそう思つて腰を上げようとする。手に食い込むアスファルトの痛み。体重がさらに境界を変形させて、凸凹な痕を記憶する。だがその一連の流れを断ち切つて、私に話しかける誰かが目の前にいた。

「手伝いましょうか？」

女性の声だった。

一瞬間が地面に向いた間に、おそらく彼女は私の前を通りかかったのだろう。そして親切に手を貸そうとしてくれている。

だが見知らぬ人間に話しかけられて、驚かない人間はいない。それが特に美しい人間なら尚更にだ。

ふと顔を上げて見ると、私は不意を疲れたように尻もちをついてしまった。

「ああ、ごめんなさい。そんなつもりはなかったの」

慌てて私を起こそうとする女性。しゃがんで私の背を押してくれる。

「ありがとうございます」

「いえいえ」

微笑む顔に、私は目を奪われた。完成されている。強制的にそう感じさせられる彼女の顔は、心理の奥深くに刻まれた、普遍的なものに依拠しているはずだ。無条件的な好意は、まるで子どもだ。だが長い濡鴉の髪が、彼女の幼稚さを引き締め、彼女を面妖な女性に昇華させている。白いワンピースも、私より少し大きな身長によく似合っている。ただ気になるのは、彼女の腕や胴、首周りで、全体的に長く痩せ細っている。例外はその胸だろうが、それでもこの日差しの中の真っ白すぎる肌は、不健康さを醸し出していた。夏至の雪だるま。それが私の彼女に対する第一印象だ。

その逆を計るとどうだろう。